

キャラクター名	プレイヤー名
【微睡の樹像】ディアナ・クロック	

種族	センチアン	種族特徴	刻まれし聖印、神の庇護、神への祈り		
生まれ	神学者	性別	女	年齢	製作時期神紀文明
冒険者Lv	17	経歴	受肉した時何も着ていなかった		
経験点	5000		大規模な儀式の結果生まれた 過去に受肉し、影像に戻ったことがある（二度目以降の受肉）		

	能力値	A-F	成長	他修正	能力値	ボーナス	
技	6	器用度	4	19	30	59	9
		敏捷度	8	25	30	69	11
体	11	筋力	4	14	30	59	9
		生命力	2	34	30	77	12
心	9	知力	12	62	30	113+1	19
		精神力	12	46	30	97	16

技能	Lv.	技能	Lv.	技能	Lv.	技能	Lv.
ソーサラー	15	デーモンルーラー	3				
コンジャラー	17						
プリースト/キルヒア	13						
フェアリーティマー	1						
セージ	13						
エンハンサー	5						
アルケミスト	5						

戦闘特技			
ルーンマスター	IB34p		p
鋭い目	2120p		p
弱点看破	2121p		p
マナセーブ	2123p		p
マナ耐性	3144p		p
魔法拡大/数	IB39p		p
魔法収束	IB39p		p
魔法誘導	IB32p		p
魔法制御	IB32p		p
魔晶石の達人	IB32p		p
魔力強化	IB32p		p
マリオネット	IB38p		p
クリティカルキャスト	IB36p		p
魔法拡大/確実化	IB38p		p
魔法拡大/距離	IB39p		p
	p		p
	p		p
	p		p

技能	基本 レベル	基本 命中力	基本 回避力	基本追加 ダメージ
ファイター	0			
グラップラー	0			
フェンサー	0			
シューター	0			

鎧と盾	必要			
	ランク	筋力	回避力	防護点
鎧	ソフトレザー	7	0	3
盾				
その他補正(防具習熟/回避行動 etc)				
回避技能	合計値			0 11

武器	用法	必要 筋力	命中 修正	命中力	C値	追加 ダメージ	威力	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
樹王剣ファルンゴーン つよい。	2H	10		2d+ 0		0											
				2d+													
				2d+													
				2d+													
				2d+													
				2d+													
				2d+													

制限移動	通常移動	全力移動
3 <sub>m</sub>	69 <sub>m</sub>	207 <sub>m</sub>

回避	防護点
2d+ 0	11

HP
128

魔法技能	Lv.	魔力	魔法技能	Lv.	魔力
真語魔法	15	49	召異魔法	3	37
操霊魔法	17	51			
深智魔法	15	51			
神聖魔法	13	47			
妖精魔法	1	22			

魔物知識/弱点	先制力
2d+ 44	2d+ 0

生命抵抗	精神抵抗
2d+ 32	2d+ 36

MP
244

装備品	説明
頭 とんがり帽子	+1ぐらい知ってる
耳 蝙蝠の耳飾り	目が見えないので使ってる
顔 ひらめき眼鏡	見識、探索判定+1
首	
背中 インテリアマルサック	酔いどれウサギの爺さん探、魔、危機、畏+1
右手 知性の指輪	パリパリ割って元気に超えよう
腰 アルケミーキット	デュエルスタンバイ
足 聖印（足環）	金のメッキの足環に水晶がはまっている
その他	

装備品	説明
左手	

その他メモ	自動失敗 チェック
一度目の受肉の際には、あまりにうろさすぎたために、影像に戻された。その後、口を取られた。	
二度目の受肉の際には、その異形の姿にまたすぐに影像に戻された。なんて理不尽な、と思ったが言わなかった。口がないから。	
三度目の受肉……がされることは長らくなかった。口を作りなおしたあと、別の影像に取り掛かってしまい、儀式を行うのを忘れられたから	□□□□⑤
だ。またなんて勝手なんだと思ったが、言わなかった。口は動かず、声帯も震えなかったから。	□□□□⑩
それから何年が過ぎただろうか。身体には埃がつもり、白いその肌は灰色の汚れにまみれていた。	□□□□⑮
何度も何度も、意識だけがまどろみ、倉庫に空いた隙間から漏れる陽の光や月の光を浴び、歓びに震えた。それにも飽き、そしてまた美しさに感動した。何度も、何度も。	□□□□⑳
突然、大きな揺れがあった。体が倒れた。上から屋根が落ちてきた。	□□□□㉒
……何も、見えない。真っ暗闇だけ。黒い。全部、黒い。塗りつぶされた黒、黒、黒。	□□□□㉔
時々、優しく冷たい光を感じていた。ぼんやりと自分の身体が浮き上がるような、そんな感覚を。	□□□□㉖
そうして、意識は微睡の中へと消えていく。長い、あまりにも長い。茫漠とした時間がそこには確かに横たわっていて、じっとりとその身を	□□□□㉘

